

助成年度：平成 12 年度

[所属] 東京大学大学院 農学生命科学研究科

[役職] 教授

[氏名] 鈴木 和夫 (他計 4 名)

[課題]

里山林の構造と機能と比較評価

[内容]

里山は、人間生活との密接な関わりの場として、また生物多様性の場として、近年その存在意義に関心が高まっている。そこで、住民との関わり合いの異なる各地の里山の機能について、過去の管理履歴との観点からその生態的特性を明らかにし、そして、マツタケ山などのマツ林の里山機能の高度化を目的とした。

調査対象の一つである伊豆半島南部の里山では、広葉樹二次林が常緑型と混交型の林冠型に区別される。そして、過去の薪炭林の管理履歴の違いによって、萌芽力の比較的高いコナラ、サクラ類、エコツキ、クリ、クヌギなどコナラ林要素の落葉広葉樹は、今後遷移過程において衰退していくことが予想された。常緑広葉樹二次林から落葉広葉樹二次林への移行降帯付近の雑木林は、この 2 つの林相の共存によって生物多様性が著しく高められていることを考えると、その保全にはこれらの群落構成種の共存性を尊重する管理が今後求められる。

一方、マツタケ山などのアカマツ林は、人々の生活圏の拡大と共に分布域を広げてきたが、人々の生活との関わりが希薄になるに従い、また、松くい虫被害によって著しく荒廃している。そこで、健全なアカマツ林の育成を目指して、林内施業およびマツタケ・アマタケの食用菌類の孢子散布を行い、孢子散布後の子実体の発生と外生菌根の動態を明らかにした。その結果、従来行われている除伐や地掻きは、定着している外生菌根菌を制御する上からも有効な方法であり、また、マツタケ・アマタケの孢子散布が子実体発生に有効であることが確認された。

このような観点から、今後積極的に里山林利用を図ることが望まれる。